

登 録 速 報

農 薬 名：クミアイトップジンM水和剤（登録番号：第 11574 号）

適用拡大登録月日：平成27年11月11日

適用拡大登録内容：

- 作物名「はくさい」の適用病害虫名に「菌核病」を希釈倍数「1500～2000 倍」で追加する。
- 作物名「レタス」の使用方法「散布」の適用病害虫名に「すそ枯病」を希釈倍数「1500 倍」で追加する。
- 作物名「すいか」の適用病害虫名に「菌核病」を追加する。
- 作物名「らっかせい」の希釈倍数「1500 倍」の適用病害虫名に「茎腐病」を追加する。
- 作物名「いちじく」の使用方法「灌注」について、使用液量「1L/株」を「1～10L/株」に、又、使用時期「定植時及び生育期 但し収穫 30 日前まで」を「収穫前日まで」に、それぞれ変更する。

【変更後】 変更作物のみ

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	チアファネートメチルを含む農薬の総使用回数
はくさい	菌核病	1500～2000倍	100～300 L/10a	収穫7日前まで	2回以内	散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は2回以内)
	白斑病	1500倍					
レタス	すそ枯病	1500倍	1.5L/m ²	収穫45日前まで	1回	灌注	4回以内 (種子への処理は1回以内、 灌注は1回以内、 散布は2回以内)
	菌核病 灰色かび病	1500～2000倍					
	ビッカベイン病	1500倍					
すいか	菌核病 炭疽病	1500～2000倍	100～300 L/10a	収穫前日まで	5回以内	散布	6回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は5回以内)
らっかせい	褐斑病 黒渋病 灰色かび病	1500～2000倍		収穫7日前まで	4回以内		5回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は4回以内)
	茎腐病 そうか病	1500倍	200～700 L/10a	収穫前日まで	5回以内	灌注	14回以内 (塗布は3回以内、 灌注は6回以内、 散布は5回以内)
いちじく	黒葉枯病	1000倍					
	黒かび病	1000～1500倍					
	そうか病	1500倍					
	株枯病	500倍	1～10 L/株	収穫前日まで	6回以内		

注意事項の変更：

【変更前】

- ぶどうに使用する場合、幼果期以降の散布は果粉の溶脱や果実の汚れを生ずるおそれがあるので注意すること。
- いちご萎黄病防除に使用する場合には下記の注意を守ること。
 - 萎黄病多発地では本剤の浸漬処理、灌注処理のみでは効果が不十分な場合もあるので、植付前には土壌くん蒸を行い、本剤処理との組合せで防除すると有効である。
 - 本剤の灌注処理は土壌の種類や条件によって効果に差が認められるので特に初めて使用する場合には病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
 - 萎黄病は、土壌温度の高い時(20℃以上)に発生しやすいので本剤の灌注処理は地温の高い仮植時期に処理すること。
 - 灌注処理の場合、土壌条件などによっては葉色が劣ったり、多少生育抑制のみられる場合もあるが、その後の生育や収量の影響は認められていない。

○根部浸漬の場合は、浸漬時間が長く(所定時間以上)なると薬害(活着不良)を生ずるおそれがあるので、処理時間を厳守すること。

●いちごうどんこ病防除に使用する場合は下記の注意を守ること。

●いちじくの株枯病に対して灌注処理する場合は、1ヶ月間隔で使用する事が望ましい。

●水稻の種子消毒に使用する場合は、下記の注意を守ること。

○消毒後は水洗せずに浸種または播種すること。

○浸漬処理薬液の温度はなるべく10℃以下をさけること。

○粃と浸漬処理薬液の容量比は1:1以上とし、種粃はサラン網などの目のあらい袋を用い、薬液処理時によくゆすること。

○低濃度(300~500倍)長時間浸漬の場合は、薬液浸漬処理中1~2回攪拌すること。

○本剤処理を行った種子の浸種に当たっては次の注意を守ること。

・薬剤処理した種粃は少なくとも数時間は放置して風乾後浸種すること。

・浸種は停滞水中で行うこと。

・浴比は1:2とし、水の交換は原則として行わないこと。但し、液温が高温の場合など、酸素不足になるおそれがあるときには静かに換水すること。

○薬剤処理した種子は、食糧、飼料に使用しないよう注意すること。

●かんしょ、さといもの種いも消毒後は水洗せずに薬液が乾いてから植付けること。薬剤処理した種いもは食糧、飼料に使用しないこと。

【変更後】

●ぶどうに使用する場合は、幼果期以降の散布は果粉の溶脱や果実の汚れを生じるおそれがあるので注意すること。

●いちごの萎黄病防除に使用する場合には下記の注意を守ること。

○萎黄病多発地では本剤の浸漬処理、灌注処理のみでは効果が不十分な場合もあるので、植付前には土壌くん蒸を行い、本剤処理との組合せで防除すると有効である。

○本剤の灌注処理は土壌の種類や条件によって効果に差が認められるので特に初めて使用する場合には病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

○萎黄病は、土壌温度の高い時(20℃以上)に発生しやすいので本剤の灌注処理は地温の高い仮植時期に処理すること。

○灌注処理の場合、土壌条件などによっては葉色が劣ったり、多少生育抑制のみられる場合もあるが、その後の生育や収量の影響は認められていない。

○根部浸漬の場合は、浸漬時間が長く(所定時間以上)なると薬害(活着不良)を生じるおそれがあるので、処理時間を厳守すること。

●いちごのうどんこ病防除に使用する場合は下記の注意を守ること。

●いちじくに対して灌注処理する場合は次の事項に注意すること。

○1ヶ月間隔で使用する事が望ましい。

○生育抑制などの薬害を生じるおそれがあるので、ポット栽培などの根域が抑制される栽培条件での使用はさけること。

●水稻の種子消毒に使用する場合は、下記の注意を守ること。

○消毒後は水洗せずに浸種または播種すること。

- 浸漬処理薬液の温度はなるべく 10℃以下をさけること。
- 籾と浸漬処理薬液の容量比は 1 : 1 以上とし、種籾はサラン網などの目のあらい袋を用い、薬液処理時によくゆすること。
- 低濃度 (300~500 倍) 長時間浸漬の場合は、薬液浸漬処理中 1~2 回攪拌すること。
- 本剤処理を行った種子の浸種に当たっては次の注意を守ること。
 - ・薬剤処理した種籾は少なくとも数時間は放置して風乾後浸種すること。
 - ・浸種は停滞水中で行うこと。
 - ・浴比は 1 : 2 とし、水の交換は原則として行わないこと。但し、液温が高温の場合など、酸素不足になるおそれがあるときには静かに換水すること。
- 薬剤処理した種子は、食料、飼料に使用しないよう注意すること。
- かんしょ、さといもの種いも消毒後は水洗せずに薬液が乾いてから植付けること。薬剤処理した種いもは食料、飼料に使用しないこと。

以 上